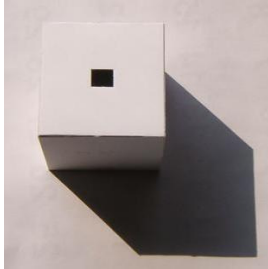




大都会は道路の両側にビルが林立しています。雑踏とビルの壁面に圧倒され息苦しさを感しながら歩く途中、まだ建物が立ち上がらない工事現場の隙間から、西日を受けたビルの風景が見えたりするとホッとします。

この感覚は圧迫感からの解放もありますが、連続した単調なこちらの世界と違い、向こう側の世界を覗き見る好奇心の力に由来するからだだと思います。受身の姿勢から積極性が発揮できるからでしょう。

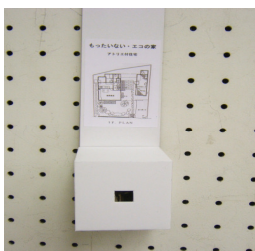
子供のころ退屈しのぎに障子の穴から外を覗き見るといつも見慣れている庭の風景が違って見えたこと、また、雨戸の節穴から射しこむ朝日が床に丸い模様を作ったり、障子に外の風景がうっすら逆さに映る様は、いつもと違う世界が見え面白かったことを思い出します。



「箱」を見ると中に何が入っているのかなあーと思いめぐらします。そこに穴があれば中を「覗き」見たくなるのは人情です。玉手箱は開けては駄目ですよと言われてもついつい開けてみたくくなります。初めての室内に入るとなぜか窓の方に向かい外がどうなっているか確認する行動を人は起こします。これも好奇心、はたまた安全確認？いや、覗き見の心理が働いているからでしょう。



窓からの風景はなぜか美しい。それも少し離れて見ると外の景色は木々の緑や紅葉の色が冴えて見える。私の観察では窓回りが額縁になり、さらに内外の明暗の差により外の色は彩度や輝度が増すように見える、これは目の錯覚と思われれます。



室内もまた大きな箱といえます。そこにある窓はこれもまた、大きな穴

です。外は広がりのある風景でも窓を通して見ると限定され絵のように変化して見えます。目もまた箱に穴が開いた状態と同様の構造となっていて、網膜に映る電磁波（光）を感知して見えるその景色は自分自身の存在を認識していることとなります。この風景を意識することやその視覚システムでものを認識していると考えると動物・人間はすごいですね。

「覗き」見た景色は見た人の思い込みの度合い、その期待度により見える風景の色合いが大きく変化します。この現象を逆利用して表現の効果を狙うテクニックもあります。



一枚の写真は立体的風景を平面に落としてあるため全てのものが等距離にあり同時に見ることができます。その反面、ものの立体感、つまり「遠近」が見えにくくなり面白さに欠ける欠点があります。

屏風は独得の道具です。その使い方はさておき、起立しているギザギザの形態の中に描かれている絵柄は単に1枚の平面に書かれた絵がたまたま屏風になっているのではなく画家はその状態「遠近」を意識して描いているのではないかと考えています。俵屋宗達の「風神雷神」は気品に満ちた怒濤の迫力があります。

ではその写真を箱の中にセットするといかように見えるでしょう。覗き見た箱の中は限定された空間であるにもかかわらず無限の広がりを感じます。そこに写真を置けばその置き方次第で平面が立体的に見えるようになるのではないかと思いました。

使用した写真は私が手がけた新築の家・古材利用の家やあかりの造型などです。

